

Title	友人関係の形成過程におけるシャイネスの影響 : 大学新入生の縦断的研究
Author(s)	石田, 靖彦
Citation	対人社会心理学研究. 2003, 3, p. 15-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9455
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

友人関係の形成過程におけるシャイネスの影響 - 大学新入生の縦断的研究 -

石田 靖彦(愛知教育大学教育学部)

本研究では、大学新入生の友人関係を、入学1ヶ月後から縦断的に測定し、シャイネスが友人関係の形成過程に及ぼす影響について検討した。被験者は、大学新入生の男性97名、女性59名であった。その結果、1)男性の場合に限り、シャイな人の友人ネットワークは、シャイでない人に比べて小さく、それはシャイな人が新たな友人関係を形成できにくいためであることが示された。2)シャイな人の友人関係は、相互作用、親密性の認知の両次元で、親密な関係にまで進展しなかった。3)相互作用と親密性の認知の相関は、時間経過に伴って増大するが、シャイな人ほど関係の初期の段階から高い相関を示す傾向にあることが示された。これらの結果から、シャイな人が親密な友人関係を形成できない要因について考察された。

キーワード:シャイネス、友人関係の親密化、大学新入生、縦断的研究

問題と目的

シャイネスとは、「社会的状況を回避し、社会的接触場面に適切なやり方で参加することに失敗し、対人的相互作用場面で不安、苦痛、負担を感じる傾向」と定義され、状況を越えて比較的安定した一種の人格特性と考えられている(e.g., 相川, 1991; Pilkonis, 1977)。

シャイネスに関する実証的研究は、Zimbardo (1977)を契機に数多くなされてきた。初対面の他者との相互作用を検討した研究では、シャイな人ほど会話を始めるまでの時間が長く、口数や視線交叉が少なく、沈黙が多いなどの抑制的行動を示すことが明らかにされた(e.g., Cheek & Buss, 1981; Daly, 1978; Pilkonis, 1977)。また、認知的側面に関する研究では、シャイな人ほど自己のパフォーマンスや他者からの印象評定の推測に関して、実際以上に否定的な認知を行うことが報告された(e.g., Clark & Arkowitz, 1975; Jones & Briggs, 1984; 栗林・相川, 1995)。

しかしながら、これら初対面の他者を相手とした実験室実験に比して、シャイな人の現実の友人関係や社会的ネットワークの特徴を検討した研究は少ない。とくに、友人関係の形成過程に関する研究はほとんどなされていない。従来の実験室実験では、シャイな人がもっとも不安感や不快感を感じるとされる初対面の他者や異性、新奇な状況を設定している点でシャイな人の行動的・認知的特徴を見出しやすい(Zimbardo, 1977)。しかしその結果は、新奇な場面である実験室によって引き起こされたとする解釈が可能であり、どの程度まで現実の友人関係に適用できるのかには疑問が残る。また、これらの研究では、相手に対する印象評定や相手からの印象評定の推測といった、自他のパーソナリティ認知が中心であり、相

手との関係をどう認知するかという観点からの検討はみられない。友人関係の親密化過程では、対人相互作用と相手との関係の認知は相互に関連を及ぼしながら進展するものであり、そこでは親密性の認知がより重要な役割を果たすと考えられる。このような考えから、石田(1998)は、大学新入生の友人関係の親密化を両者間の相互作用と親密性の認知の二側面から測定し、シャイネスとの関連を検討している。ただし、そこでの結果は、入学後3ヶ月後と8ヶ月後の横断的データに基づくもので、知り合っからの友人関係を縦断的に検討したものではない。また、大学で新たに形成された特定の友人関係しか測定されておらず、その他の関係については検討されていないという問題点もある。友人関係は、深さ(=親密性)と広がりという、二つの側面から捉えることが可能であり、友人関係の形成過程を包括的に検討するには、特定の友人との親密化のみならず、それを取り巻くその他の関係の検討も必要と考えられる。

そこで、本研究では友人関係の形成過程を、(1)大学入学に伴う友人ネットワークの変化と、(2)大学で新たに形成された特定の友人関係の親密化、という二つの側面から検討する。そして、これらの観点から測定された友人関係が、シャイな人とシャイでない人でどのように異なるのかを縦断的に検討する。以上が本研究の目的である。

友人ネットワークの変化

Goering & Breidenstein (1989)は、シャイな人とシャイでない人の社会的ネットワークを比較検討し、シャイな人のネットワークは、シャイでない人に比べて小さく、友人との関係継続期間が長いことを見出した。Jones & Carpenter (1986)も、大学生の友人関係を検討し、シャイネスが友人の数や信頼できる人の数、関係に対する満

足感と負の相関を示し、逆に関係の継続期間と正の相関を示すことを報告している。これらの結果から、シャイな人は新たな友人関係を形成することが困難である反面、一度形成された友人関係は維持されやすいことが示唆される。ただし、これらの知見は、生活環境に大きな変化のない状況で認められたものであり、友人との交流が困難となる事態でも、その関係を維持できるかどうかは明らかでない。たとえば、Yamamoto & Ishii (1995) は、入学以前の友人数と入学後に形成された友人数の推移から被験者を分類し、入学以前の友人に代わる新たな友人を形成できず、しかも旧来の友人との関係も維持できずに、孤立するタイプが存在することを指摘している。そこで本研究では、入学以前に形成された友人関係と入学後に形成された友人関係を測定し、シャイな人とシャイでない人を比較検討する。

仮説については、シャイな人ほど新たな友人関係の形成に困難を示すといわれることから、シャイでない人に比べて入学後に形成される友人関係が増大しにくいことが予測される。入学以前の友人関係については明らかでないが、シャイな人が旧来の友人関係の維持においても困難を示すなら、彼らの友人関係は大きく縮小することが予測される。

友人関係の親密化

親密化過程に関する実証的研究の多くは、Altman & Taylor (1973) の社会的浸透理論をもとになされてきた。社会的浸透理論では、両者間の相互作用から現在および将来の関係における報酬とコストが評価され、その評価に基づいてその後の相互作用が方向づけられると仮定される。しかし、近年の研究では、関係の進展・崩壊を左右すると考えられる報酬やコストの評価も、相手との関係をどう認知するかによって異なることが示され、親密化過程における関係認知の重要性も指摘されている。そして、どのような相互作用が親密性を規定するか、さらに親密性の認知はその後の相互作用にいかなる影響を及ぼすかを検討する研究もなされてきた。たとえば、Hays (1984, 1985) は、大学新入生の友人関係を相互作用と親密性の認知の二側面から縦断的に測定し、親密性の認知が両者間の相互作用のあり方に大きく規定されること、さらに、親密性の認知を規定する相互作用は男女で異なり、知り合ってから期間によっても異なることを明らかにした。

相互作用と親密性の認知間の関連性が、知り合ってから期間や被験者の性別によって異なる理由のひとつには、相互作用から相手との関係を判断する際の評価・解釈基準が、親密化の程度や性別によって異なることが考えられる。親密化途上にある段階では、どのような相互作用を営んだかが、相手との関係を判断する際に重要な情

報となるが、関係が親密になった段階では、多くの相互作用をもたなくても親密性の認知は維持されるだろう。また、女性は男性に比べて情緒的なつながりを求める傾向が強いために、多くの相互作用を行う以前から親密性の認知を過剰に判断することが考えられる。

ただし、相互作用と親密性の認知間の関連性について、個人差要因を含めて検討した研究はほとんどみられない。先述したように、シャイな人は対人行動を抑制するだけでなく、自己否定的な認知を行うことが指摘されている。これらの知見から考えると、親密化の程度や性別の要因と同様に、シャイな人とシャイでない人では、相互作用から親密性を評価・判断する基準が異なる可能性が指摘できる。そこで本研究では、親密化過程にある友人関係を、相手との相互作用と親密性の認知の二側面から測定し、両側面の推移と両側面間の関連性について検討を加える。

まず、相互作用と親密性の認知の推移に関しては、シャイな人はシャイでない人に比べて、相互作用、親密性の認知ともに増大しにくいことが予測される。

また、相互作用と親密性の認知との関連については、知り合ってから期間が長くなるにつれ、相互作用と親密性の認知間の相関は増大することが予測される。なぜなら、知り合ってから間もない時点では、実際の相互作用が乏しいため、親密性の認知は相互作用に基づかない事柄から推測せざるを得ないと考えられるからである。ただし、シャイネス高・低群間の違いについては、従来の研究では検討されておらず、それが知り合ってから期間経過に伴って、どのように変化するのかを現状の段階で予測することは困難である。そこで、この点については探索的に検討することとした。

方法

調査対象および調査時期

愛知県内の国立大学に所属する大学新入生を調査対象とした。友人関係の親密化に関する研究では、知り合ってから約 2 ヶ月間が関係形成期にあたることが指摘されている (e.g., Hays, 1984, 1985)。そこで本研究では、1 回目の調査を大学入学後約 1 ヶ月の時点にあたる 1996 年 4 月下旬に行い、2 回目の調査を入学後約 3 ヶ月を経過した 6 月下旬に行った。被験者および被験者の挙げた友人対象は、生年月日、血液型、イニシャルなどを用いてマッチングを行った。これら 2 回の調査にともに回答し、かつ被験者およびその友人対象がマッチングできた被験者のみを分析対象とした。この基準を満たす被験者は、男性 97 名、女性 59 名の計 156 名であった。

さらに、上記の関係がどの程度維持されるのかを確認するために、フォローアップ調査を夏季休業明け直後の

9月上旬に行った。フォローアップ調査をこの時期に設定した理由は、夏季休業期間中は相互交流が行いにくく、相互作用が減少した事態における親密性の認知の推移を、より明確に検討しようと考えたからである。

質問紙の構成

質問紙は、1)友人ネットワークを捉える質問項目と、2)大学に入ってから知り合った友人関係に関する質問項目の、二つの質問群から構成された。これらの質問項目は、各調査時期に繰り返し用いられた。

友人ネットワークに関する質問項目 クラブ・サークルへの加入・非加入、恋人の有無、および親しい同性の友人の人数に関する質問項目から構成された。友人ネットワークの測定法は Stokes(1985)にならい、「ここ3週間の間に何らかの相互作用を行った親しい同性の友人」の人数を記述させた。「何らかの相互作用」については、Wheeler & Nezlek(1977)にしたがって、会話や電話、一緒に行く活動などを指し、廊下での単なるあいさつなどは含まれないことを口頭で伝えた。

大学で形成された友人関係に関する質問項目 1回目の調査において、「大学に入ってから知り合った友人の中で、もっとも親しい(親しくなりそうな)同性・同年輩の友人」をひとり挙げさせ、その人物との関係を、両者間の相互作用、関係の親密性の認知、の二側面で評定させた。調査2回目、およびフォローアップ調査(調査3回目)では、調査1回目に挙げた友人対象について評定させた。なお、この友人対象はすべての時期で同一であることが確認された。

両者間の相互作用: 石田(1998)で用いられた48の行動項目を使用した。各行動項目は、「ここ3週間の間に」という教示のもとに、「自分が行った行動(=相手に対する行動)」「相手が行った行動(=相手からの行動)」のそれぞれに関して、「あった<1>・なかった<0>」の2段階で評定させた。各尺度の係数は、いずれの調査時期でも.86~.92の範囲にあり、高い内的整合性を有していると考えられた。

関係の親密性の認知: 「相手に対する親密性」「相手からの親密性の推測」という双方向の尺度によって測定した。各尺度は、親密性の諸側面(e.g., 理解・受容、信頼感、自己開示性など)を反映するよう留意して、それぞれ同様の14項目(e.g., 「彼(彼女)の長所も短所も、大体知っている」「彼(彼女)のことを、基本的に信頼している」)から構成された。各項目は、今現在の相手との関係に関して、「よくあてはまる<5>」~「まったくあてはまらない<1>」の5段階で評定させた。各尺度は因子分析(主因子解)により、強い一因子性が確認された。各尺度の係数は、いずれの調査時期でも.84~.91の範囲にあり、高い内的整合性を有していた。

なお、調査1回目では、被験者のシャイネスの程度を測定するために、「特性シャイネス尺度(相川, 1991)」が実施された。

結果

男女別にシャイネス得点を算出したところ、男性 48.6 ($SD = 13.52$)、女性 47.9 ($SD = 15.43$)で、男女間に有意差は認められなかった($t(154) = 0.30, n.s.$)。しかし、親密化過程に関する研究では多くの性差が報告されるため、以下の分析は男女別に行うこととした。男女別に平均値以上・未満の被験者を「シャイネス高群」「シャイネス低群」として分類した。シャイネス得点の群間差は、男女いずれも有意であることが確認された(男性: $t(95) = 13.58, p < .001$; 女性: $t(57) = 11.48, p < .001$)。

友人ネットワークの比較

Table 1 は、クラブ・サークル活動に参加している被験者の割合、恋人のいる割合、および「ここ3週間の間に何らかの相互作用を行った親しい同性の友人」の人数である。

Table 1 友人ネットワークの推移

	シャイネス高群		シャイネス低群	
	調査1回目	調査2回目	調査1回目	調査2回目
<男性>				
クラブの加入率	43.8%	75.0%	61.2%	81.6%
恋人のいる割合	16.7%	14.6%	16.3%	24.5%
同性友人の人数				
大学内の旧友人	2.1	2.6	2.3	2.6
大学内の新友人	5.6	11.4	8.9	15.2
大学外の旧友人	2.8	4.2	4.8	4.3
大学外の新友人	0.4	1.1	0.1	3.2
<女性>				
クラブの加入率	41.9%	80.6%	53.6%	75.0%
恋人のいる割合	16.1%	22.6%	17.9%	25.0%
同性友人の人数				
大学内の旧友人	1.8	2.2	2.5	2.6
大学内の新友人	8.0	12.0	10.5	17.7
大学外の旧友人	4.7	5.8	4.1	3.1
大学外の新友人	0.0	0.7	0.1	1.0

注: 「旧友人」とは、大学入学以前から知り合いであった友人のこと
「新友人」とは、大学入学後に知り合った友人のこと

クラブ・サークル活動については、男性の調査1回目でのみ、シャイネス高群が低群に比べて、加入率が低い傾向にあることが示された($\chi^2(1) = 2.97, p < .10$)。恋人の有無については、いずれの時期でも、シャイネス高・低群間に有意な差は認められなかった(1回目: 男性 $\chi^2(1) = 0.00, n.s.$, 女性 $\chi^2(1) = 0.31, n.s.$; 2回目: 男性 $\chi^2(1) = 1.51, n.s.$, 女性 $\chi^2(1) = 0.05, n.s.$)。

同性の友人関係については、同性友人の全体数、および各友人タイプに関して、シャイネス高・低×調査時期の

分散分析を行った。分析における友人数は、平方根変換した値を用いた。その結果、友人の全体数については、男性で、シャイネスの主効果 ($F(1, 95) = 4.89, p < .05$)、調査時期の主効果 ($F(1, 95) = 36.45, p < .001$) が有意となった。各友人タイプについて、同様の分析を行ったところ、「大学内の新友人」でシャイネスの主効果 ($F(1, 95) = 4.26, p < .05$)、調査時期の主効果 ($F(1, 95) = 36.49, p < .001$)、「大学外の新友人」でシャイネスの主効果傾向 ($F(1, 95) = 2.91, p < .10$)、調査時期の主効果 ($F(1, 95) = 27.22, p < .001$)、およびシャイネス×調査時期の交互作用 ($F(1, 95) = 7.05, p < .01$) が認められた。しかし、「大学内の旧友人」「大学外の旧友人」では、主効果、交互作用ともに有意とはならなかった。

一方、女性では、友人の全体数の分散分析で、調査時期の主効果 ($F(1, 57) = 15.28, p < .001$) のみが有意となり、シャイネスの主効果 ($F(1, 57) = 1.24, n.s.$) は認められなかった。友人タイプ別の分散分析でも、「大学内の新友人」「大学外の新友人」で、調査時期の主効果 (それぞれ $F(1, 57) = 23.05, p < .001$; $F(1, 57) = 22.18, p < .001$) が認められたのみで、「大学内の旧友人」「大学外の旧友人」では、主効果、交互作用ともに有意とはならなかった。

大学で形成された友人関係の比較

相互作用と親密性の認知の時系列的変化 「大学に入ってから知り合った友人の中で、もっとも親しい(親しくなりそうな)同性・同年輩の友人」について、シャイな人とシャイでない人の相互作用と認知の推移を検討した。相互作用については、「相手に対する行動」「相手からの行動」を行動の方向の要因として捉え、シャイネス高・低×方向×調査時期の3要因の分散分析を行った。親密性の認知についても、「相手に対する親密性」「相手からの親密性の推測」を方向の要因として、同様の分析を行っ

た。結果を Table 2 に示す。

男性については、相互作用の分散分析で、シャイネスの主効果傾向 ($F(1, 95) = 2.98, p < .10$)、方向の主効果 ($F(1, 95) = 9.56, p < .01$)、調査時期の主効果 ($F(1, 95) = 16.02, p < .001$)、シャイネス×方向×調査時期の二次の交互作用 ($F(1, 95) = 5.40, p < .05$) が有意となった。親密性の認知の分析では、シャイネスの主効果 ($F(1, 95) = 6.85, p < .05$)、方向の主効果 ($F(1, 95) = 34.42, p < .001$)、調査時期の主効果 ($F(1, 95) = 6.87, p < .05$)、方向×調査時期の交互作用 ($F(1, 95) = 5.40, p < .05$) が有意となった。

Table 2 に示されているように、シャイネス高・低群ともに、知り合ってから期間が長くなるにつれて、相互作用は増大し、それに伴って親密性の認知も上昇していた。相互作用、親密性の認知は、いずれも相手よりも自らの方が上回っていることが示されているが、これは、本研究の友人対象が被験者の認知する「もっとも親しい(親しくなりそうな)」友人であり、親密化の動機づけを有する対象であったためと解釈することができる。

シャイネス高・低群間の違いについては、シャイネス高群は低群に比べて、1ヶ月の時点、3ヶ月の両時点ともに相互作用が少なかった。また、親密性の認知も、シャイネス高群の方が低群に比べて低かった。これらの結果から、シャイな人の友人関係では活発な相互作用が展開されにくく、親密化しにくいといえる。

女性の友人関係では、相互作用でシャイネスの主効果傾向 ($F(1, 57) = 3.58, p < .10$)、調査時期の主効果 ($F(1, 57) = 5.29, p < .05$)、シャイネス×方向×調査時期の二次の交互作用 ($F(1, 57) = 9.43, p < .01$) が認められた。しかし、親密性の認知ではシャイネスの主効果 ($F(1, 57) = 5.55, p < .05$)、方向の主効果 ($F(1, 57) = 42.9, p < .001$) が有意となったのみで、調査時期の主効

Table 2 調査1回目、調査2回目における相互作用と親密性の認知

	シャイネス高群		シャイネス低群	
	調査1回目	調査2回目	調査1回目	調査2回目
< 男性 >				
相手に対する行動	12.7 (5.88)	15.4 (7.53)	15.6 (6.79)	17.9 (10.07)
相手からの行動	11.6 (5.32)	15.5 (7.35)	14.5 (6.50)	16.5 (10.15)
相手に対する親密性	47.2 (5.76)	48.3 (6.18)	50.1 (7.07)	50.9 (9.16)
相手からの親密性の推測	43.2 (6.14)	46.4 (6.69)	47.6 (6.28)	49.0 (8.74)
< 女性 >				
相手に対する行動	15.9 (7.57)	17.5 (9.22)	18.9 (5.36)	21.3 (9.22)
相手からの行動	16.6 (6.75)	16.9 (9.52)	18.1 (5.60)	22.5 (9.75)
相手に対する親密性	49.8 (9.31)	50.9 (12.04)	55.6 (5.54)	53.9 (10.49)
相手からの親密性の推測	46.1 (7.33)	47.1 (9.88)	50.9 (4.95)	51.3 (7.99)

注: 括弧内は標準偏差

果は有意ならなかった ($F(1, 57) = 0.02, n.s.$)。

Table 2 に示されているように、女性の場合、知り合ってから期間が長くなるにつれて、多くの相互作用を行うようになるが、認知面では1ヶ月時点から高い値を示し、その後、大きな変化のないことがわかる。

シャイネス高・低群間の違いについては、シャイな人ほど相互作用が少なく、親密性の認知も低いことが示されている。したがって、女性についても男性の場合と同様、シャイな人ほど親密な友人関係を形成できにくいといえる。

相互作用と親密性の認知の関連 次に、各調査時期における相互作用と親密性の認知間の相関係数を算出した。なお、ここでは煩雑さを避けるために、相互作用、親密性の認知ともに、“自分から相手”“相手から自分”を込みにして分析した。結果を Table 3 に示す。

Table 3 相互作用と親密性の認知間の相関係数

	調査1回目	調査2回目
< 男性 >		
シャイネス高群	.51 ***	.54 ***
シャイネス低群	.34 *	.51 ***
< 女性 >		
シャイネス高群	.36 *	.55 **
シャイネス低群	.21	.43 *

注: *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

相互作用と親密性の認知間の相関は、男性の場合、調査1回目で $r = .45 (p < .001)$ 、調査2回目で $r = .53 (p < .001)$ であり、調査2回目の方がやや高い相関を示した。しかし、シャイネス高・低群別にみると、シャイネス高群は低群にくらべて、調査1回目でも高い相関を示していた。

女性の場合、相互作用と親密性の認知間の相関は、調査1回目から2回目にかけて大きく上昇していた(1回目 $r = .36, p < .01$; 2回目 $r = .52, p < .001$)。しかし、ここでもシャイネス高群の方が低群よりも、調査1回目から相対的に高い相関を示していた。

以上の結果は、全体的な傾向として、知り合ってから期間が長いほど、相互作用と親密性の認知間の相関は増大し、親密性の認知が両者間の相互作用をより反映するようになることを示している。また、シャイな人ほど、関係の初期段階から比較的高い相関を示しており、シャイな人ほど実際の相互作用に基づいた認知を行っていることが示唆される。

その後の関係の維持 ここまでの分析は、関係形成期とされる大学入学後3ヶ月の時点までであり、その後の推

移については明らかでない。多くの大学では、7月下旬頃から夏季休業に入り、それまでに比べて相互交流は行いにくくなると考えられる。調査2回目にあたる入学後3ヶ月の時点までに親密化が十分進行していなければ、相互作用が少なくなると同時に、親密性の認知も大きく低下することが予測される。このことを確認するために、本研究ではフォローアップ調査を夏季休業明け直後の9月上旬に行った。分析は、調査1回目と調査2回目とともに受け、その友人対象も同一であると確認された被験者のみを対象とした。この基準を満たす被験者は、男性75名、女性45名の計120名であった。結果を Table 4 に示す。

Table 4 フォローアップ調査における相互作用と親密性の認知

	シャイネス高群	シャイネス低群
< 男性 >		
相手に対する行動	11.0 (9.35)	11.0 (11.38)
相手からの行動	10.8 (9.38)	11.0 (11.22)
相手に対する親密性	48.3 (8.22)	51.4 (9.67)
相手からの親密性の推測	46.8 (6.38)	49.0 (8.48)
< 女性 >		
相手に対する行動	12.8 (8.85)	12.2 (9.13)
相手からの行動	12.8 (8.83)	12.8 (10.05)
相手に対する親密性	49.0 (10.84)	52.2 (12.59)
相手からの親密性の推測	45.0 (9.53)	50.6 (9.07)

注: 括弧内は標準偏差

Table 2 と比較すると、相互作用は大きく減少しているが、親密性の認知は調査2回目とほとんど変化していないことがわかる。このことを確認するために親密性の認知について、シャイネス高・低×方向×調査時期の分散分析を行った。その結果、男性では、シャイネスの主効果 ($F(1, 73) = 4.14, p < .05$)、調査時期の主効果 ($F(2, 146) = 6.37, p < .01$)、方向の主効果 ($F(1, 73) = 30.51, p < .001$) が有意となった。さらに調査時期の主効果について下位検定(HSD検定)を行ったところ、調査1回目 - 調査2回目の間 ($p < .01$)、調査1回目 - フォローアップ調査の間 ($p < .05$) に有意差があり、調査2回目 - フォローアップ調査の間には有意差のないことが示された。一方、女性では、シャイネスの主効果 ($F(1, 43) = 5.03, p < .05$)、方向の主効果 ($F(1, 43) = 27.99, p < .001$) のみが有意となり、調査時期の主効果は有意ならなかった ($F(2, 86) = 0.49, ns$)。

以上の結果から、大学で新たに形成された友人関係は、知り合ってから3ヶ月の時点である調査2回目までにある

程度の親密化は終了し安定期に入っていたと考えられる。したがって、この時点でもなお、シャイネス高・低群間で親密性の認知に違いが認められたことは、シャイな人の友人関係とシャイでない人の友人関係の違いが、その後も維持されると考えることができるだろう。

考 察

友人ネットワークの変化

相互作用がもっとも多かったのは、入学後 1 ヶ月、3 ヶ月のいずれの時期でも、入学後に知り合った大学内の友人であった。また、入学後に知り合った大学内外の友人数は、入学してからの期間経過に伴い増加していた。大学入学に伴って友人ネットワークが大きく変化し、入学後の新たな友人関係が大きな地位を占めるようになることは、古川・藤原・井上・石井・福田(1983)や諸井(1986)で指摘されている。しかし、入学以前の友人数については、入学後 1 ヶ月の時点ですでに少なく、その後の減少は認められなかった。本研究で測定された友人は、過去 3 週間の間に相互作用を行った人物であることを考えると、入学以前の友人関係は、大学入学の時点で親しい友人に絞られ、その関係はその後も維持されるといえるだろう。

シャイネス高・低群の違いについては、男性に限り、シャイな人ほど親しい友人の全体数が少ないことが明らかとなった。さらに友人タイプ別に検討したところ、入学後に形成された友人関係のみに違いが認められ、入学以前の友人関係には違いのないことが示された。入学以前の友人関係がどの程度親密であるかは不明であるが、知り合ってから期間が長く、しかも入学後も維持されていることを考えるとかなり親しい友人と推察される。このことから、シャイな男性は、新たに友人関係を形成することが苦手であるが、一度形成された親密な友人関係の維持についてはそれほど困難ではないと考えられる。

一方、シャイな女性については、予測に反して多くの友人関係を新たに形成しており、友人の全体数でも違いが認められなかった。女性の友人関係は、男性に比べてシャイネスの影響を受けにくいことが指摘されているが(Jones & Briggs, 1984)、これには関係形成のきっかけとなる周囲からの働きかけが関連するものと思われる。Wheeler & Nezlek(1977)は、大学新生の入学当初の交友活動について検討し、女性は男性に比べて同性間の交友活動が活発で、親密でない相手に対しても多くの働きかけを行うことを指摘している。つまり、女性の場合、シャイであっても周囲からの働きかけを受けやすく、交友関係を広げられるのではないかと考えられる。しかし、男性は女性に比べて、周囲からの働きかけを期待できないことに加えて、シャイな人ほど社会的活動に対して消極的であった。すなわち、本研究では、男性の入学 1 ヶ

月後のクラブやサークルへの加入率が、シャイな人ほど少ない傾向にあることが示されていた。大学で新たに友人関係を形成する機会はさまざまあるが、クラブやサークルに加入することも、交友関係を広げるのに効果的である。したがって、シャイな人がそのような活動に積極的に参加しなければ、彼らの活動はより広がりになると考えられる。実際、男性の調査 1 回目のクラブ・サークルへの加入・非加入は、調査 2 回目の「大学内の新友人」「大学外の新友人」と有意な正の相関を示していた($r = .23, p < .05$; $r = .23, p < .05$)。この結果は、クラブやサークルへの加入が、大学内外の新たな友人関係の形成機会となることを示しており、シャイな男性のこれらの活動への消極性が、新たな友人関係の形成をより困難にしていることを示している。

特定の友人関係の親密化

大学で新たに形成された友人関係については、予測されたとおり、シャイな人はシャイでない人に比べて、親密化が進行しにくいことが示された。男女いずれもシャイな人は、入学 1 ヶ月後、3 ヶ月後の両時点で、相互作用が少なく、親密性の認知も低かった。さらに、入学 3 ヶ月後のシャイネス高・低群間の違いは、入学 5 ヶ月後の時点でも維持されていた。この結果は、シャイな人が親密な友人関係を形成できにくいことを示すと同時に、その違いがその後も維持されつづけることを示唆している。

また、相互作用と親密性の認知の関連は、シャイな人とシャイでない人で異なることが明らかとなった。すなわち、知り合ってから期間が長くなるにつれて、相互作用と親密性の認知の相関は高くなるが、シャイな人の方が相対的に早い段階から高い相関を示すことが示された。この結果と、シャイでない人の方が高い親密性の認知判断を行うという結果とを考え合わせると、シャイでない人の親密性の認知には、実際の相互作用に基づかない側面が多分にあり、知り合ってから期間が短い段階で、過剰に高く評定されていることが推察される。

シャイでない人の方が、実際の相互作用に基づかない認知を行なうという結果は、従来の知見と矛盾するようと思われる。たとえば、石田(1998)の研究では、シャイな人は相手との関係を、相互作用の少なさ以上に親密でないものとして認知することが示されていた。ただし、そこでの結果は、シャイな人は相手との関係を否定的に認知することを示したのみで、いずれが実際の相互作用に基づいた認知を行っているのかは検討されていなかった。これに対し、本研究の結果は、相互作用と親密性の認知間の関連を検討することによって、シャイでない人よりもむしろシャイな人の方が、実際の相互作用に基づいた認知を行っている可能性を示したものと いえるだろう。

シャイでない人が、実際の相互作用に基づかない高い

親密性の認知判断を行う理由としては、彼らの親和欲求の高さが挙げられる。Cheek & Buss(1981)や Bruch, Gorsky, Collins, & Berger(1989)は、シャイネスが、他者と交友し一緒にいることを好む傾向と負の相関を示すことを報告している。また、中村(1989)は、親和欲求と関連の深い対人志向性が関係へのコミットメントに及ぼす影響について検討し、初期の段階での関係へのコミットメントが、実際の相互作用だけでなく、被験者の対人志向性の高さに規定されることを指摘している。これらの知見から、親和欲求はシャイでない人の方が高く、それが相互作用の少ない初期の親密性の認知判断に反映されるために、相手との関係が過剰に高く評定されたと考えられる。このような解釈は、相互作用と親密性の認知間の相関が、男性よりも女性の方が低かったことから妥当と思われる。女性が多くの相互作用を行う以前から、高い親密性の認知判断を行うことは従来から指摘されており、それには女性の高い親和欲求が関連しているといわれているからである(e.g., 中村, 1989; 和田・廣岡・林, 1986)。したがって、シャイな人よりもシャイでない人の方が、また男性よりも女性の方が親和欲求が高いとすれば、相互作用と親密性の認知間の相関でのシャイネス高・低の違い、および男女の違いを統一的に解釈することができる。ただし、この解釈は本研究の結果から推測された仮説にすぎず、さらに検討する必要があるだろう。

ところで、実際の相互作用に基づかない高い親密性の認知は、その後、実際の相互作用に基づいたものへと修正されると考えられる。しかし、初期の親密性の認知は、その後の相互作用を促進させ、いわば“自己成就的予言”として機能することも指摘されている。例えば、Berg & Clark(1986)や山中(1994)は、出会ってから極めて早い段階で、関係の親密化可能性に関する意思決定がなされ、その後の関係はその意思決定に沿って進展することを指摘している。つまり、関係の初期の段階でなされる親密性の認知は、たとえ実際の相互作用に基づかないものであっても、その認知によって関係の進展が促進され、現実に親密な友人関係を形成しようと考えられるのである。このような観点から考えると、シャイでない人の高い親密性の認知判断は、親密な友人関係を形成する上で効果的に機能しており、逆に、シャイな人の実際の相互作用に基づく認知は、友人関係の親密化にとっては効果的でないと考えることもできるだろう。

まとめと今後の課題

本研究では、友人関係の形成過程を、(1)友人ネットワークの変化と、(2)特定の友人関係の親密化という、友人関係の広がりや深さに対応する、二つの側面から縦断的に検討した。

友人ネットワークの分析では、男性に限ってではあるが、

シャイな人ほど友人関係が広がりやすく、大学入学という生活環境の変化事態において、友人関係が縮小しがちになることが示された。また親密化に関する分析では、シャイな人ほど親密化が進行しにくいだけでなく、シャイな人の認知判断はシャイでない人とは異なる可能性が示された。なかでも、シャイでない人の方が過剰に高い親密性の認知判断を行なっているという可能性は興味深い。近年、一般的な人は不適応とされる人より、positive に歪んだ認知を行っており、むしろそのような歪んだ認知の方が、実際の成功や良好な対人関係につながるの指摘がなされているが(遠藤, 1995)、本研究の結果はこの指摘にも通じるといえるだろう。

本研究では、シャイな人の友人関係の形成過程を記述的に示したに過ぎないが、いくつかの示唆を得ることができた。今後は、本研究で得られた示唆について、仮説検証的に検討していく必要があるだろう。

引用文献

- 相川充 1991 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62, 149-155.
- Altman, I. & Taylor, D. A. 1973 *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Berg, J. H. & Clark, M. S. 1986 Differences in social exchange between intimate and other relationships: Gradually evolving or quickly apparent? In V. J. Derlega & B. A. Winstead (Eds.), *Friendship and social interaction* (pp. 101-128), New York: Springer Verlag.
- Bruch, M. A., Gorsky, J. M., Collins, T. M., & Berger, P. A. 1989 Shyness and sociability reexamined: A multicomponent analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 904-915.
- Cheek, J. M. & Buss, A. H. 1981 Shyness and Sociability *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 330-339.
- Clark, J. V. & Arkowitz, H. 1975 Social anxiety and self-evaluation of interpersonal performance. *Psychological Reports*, 36, 211-221.
- Daly, S. 1978 Behavioral correlates of social anxiety. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 17, 117-120.
- 遠藤由美 1995 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論 社会心理学研究, 11, 134-144.
- 古川雅文・藤原武弘・井上弥・石井真治・福田廣 1983 環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達の研究 心理学研究, 53, 330-336.
- Goering, E. & Breidenstein, C. P. 1989 The web of shyness: A network analysis of communicative correlates. *Communication Research Reports*, 6, 111-118.
- Hays, R. B. 1984 The development and maintenance of friendship. *Journal of Social and Personal Relationships*, 1, 75-98.
- Hays, R. B. 1985 A longitudinal study of friendship development. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 111-118.

- Psychology*, 48, 909-924.
- 石田靖彦 1998 友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響と孤独感 社会心理学研究, 14, 43-52.
- Jones, W. H. & Briggs, S. R. 1984 The self-other discrepancy in social shyness. In R. Schwarzer (Ed.), *The self in anxiety, stress and depression* (pp. 93-107), Amsterdam: North Holland.
- Jones, W. H. & Carpenter, B. N. 1986 Shyness, social behavior, and relationships. In W. H. Jones, J. M. Cheek, & S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment* (pp. 227-238), New York: Plenum Press.
- 栗林克匡・相川充 1995 シャイネスが対人認知に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 35, 49-56.
- 諸井克英 1986 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究, 25, 115-125.
- 中村雅彦 1989 大学生の友人関係の発展過程に関する研究(1)-関係の初期差異化現象に関する検討- 日本グループ・ダイナミクス学会第 37 回大会発表論文集, 65-66.
- Pilkonis, P. A. 1977 The behavioral consequence of shyness. *Journal of Personality*, 45, 596-611.
- Stokes, J. P. 1985 The relation of social network and individual difference variables to loneliness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 981-990.
- 和田実・廣岡秀一・林文俊 1986 大学生の交友関係の進展に関する研究(1) 日本社会心理学会第 27 回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第 34 回合同大会発表論文集, 73-74.
- Wheeler, L. & Nezlek, J. 1977 Sex differences in social participation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 742-754.
- Yamamoto, T. & Ishii, S. 1995 Developmental and environmental psychology: A microgenetic developmental approach to transition from a small elementary school to a big junior high school. *Environment and Behavior*, 27, 33-42.
- 山中一英 1994 対人関係の親密化における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, 34, 105-115.
- Zimbardo, P. G. 1977 *Shyness: What it is, what to do about it*. Massachusetts: Addison- Wesley. (木村駿・小川和彦訳 1982 シャイネス 内気な人々 内気を克服するために 勁草書房)

註

- 1) 本稿は、1996 年度名古屋大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部に、加筆・修正を加えたものである。
- 2) 本研究をすすめるにあたり、ご指導頂きました名古屋大学大学院教育発達科学研究科 吉田俊和教授、村上 隆教授に心より感謝致します。

The effect of shyness on friendship development: A longitudinal study of college freshmen

Yasuhiko ISHIDA (*Faculty of Education, Aichi University of Education*)

This study investigated the shy individuals' development of close relationships during the first college semester. Ninety-seven male and 59 female freshmen responded to a series of questionnaires consisting of scales dealing with: 1) their friendship network and 2) their relationship with a new same-sex friend at their university, including (a) self-report checklist of dyadic behaviors and (b) attitudinal ratings of relationship intimacy. The following results were obtained: 1) Shy males had smaller networks than not-shy males, due to the difficulty experienced by the former in making new friends. 2) Shy individuals' relationship did not become as close as that of not-shy individuals at both behavioral and attitudinal levels. 3) Although the behavioral and attitudinal ratings of relationship became highly correlated over time, the patterns of correlation slightly differed between shy and not-shy individuals. From these results, the effect of shyness on friendship development was discussed.

Keywords: shyness, friendship development, college freshmen, longitudinal study